



TITLE:

膀胱平滑筋腫の2例

AUTHOR(S):

江本, 侃一; 重見, 文雄; 花川, 寛; 武田, 己広

CITATION:

江本, 侃一 ...[et al]. 膀胱平滑筋腫の2例. 泌尿器科紀要 1963, 9(5): 270-273

ISSUE DATE:

1963-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112429>

RIGHT:

膀胱平滑筋腫の 2 例

徳島大学医学部皮膚科泌尿器科教室（指導 荒川忠良教授）

江	本	侃	一
重	見	文	雄
花	川		寛
武	田	己	広

TWO CASES OF LEIOMYOMA OF THE BLADDER

Kanichi EMOTO, Fumio SHIGEMI, Yutaka HANAKAWA
and Korehiro TAKEDA

Department of Urology, School of Medicine, Tokushima University
(Director : Prof. Tadayoshi Arakawa)

Two cases of leiomyoma of the bladder seen in 72-year-old and 30-year-old males have been reported.

The first case was complicated with vesical papilloma, and the second with bladder stone. Twenty cases were collected from the Japanese literatures including two cases above and a brief discussion was made about this neoplasm.

膀胱筋腫の報告は最近その例数を増してはきたが、上皮性の腫瘍に比すれば極めて少ない。Hinmann によれば、膀胱腫瘍の95%は上皮性腫瘍で残り5%が間葉性および畸型腫であるとされている。間葉性腫瘍では肉腫が最も多く、良性のものに至つては極めて少ないとのことである。この良性腫瘍のうちでも平滑筋腫が比較的多く、次いで血管腫、粘液腫、横紋筋腫、骨腫の順に頻度が減じているが、何れにしても稀有な疾患であることは間違いないと思われる。わたくしらは最近相次いで純粋な平滑筋腫の2例を経験したので、ここに報告する。

症 例

症例 1 : 72才の男子，農業，昭和37年4月24日初診。

主訴：血尿。

家族歴及び既往歴：特記すべきことはない。

現病歴：約4ヶ月前から特別な誘因と思われるものもなく何等苦痛を伴わない血尿を認めるようになった。血尿は安静を保つと暫時消失するが、血尿の回数

が次第に増加してきたので来院した。排尿障害はなかった。

現症：体格中等，栄養良好。全身状態は心電図上で軽度の心筋障害が認められる他に異常はなかつた。前立腺は小鶏卵大，中溝もよく触れ，硬度も弾性軟。その他の泌尿器にも著変はなかつた。

尿所見：淡赤色に濁濁，赤血球多数，白血球は僅少。

血液所見：血沈値は1時間値 6mm，2時間値 18mm。血圧 140～180mmHg。赤血球 411×10^4 ，白血球 7,700，血色素量70%（ザーリ法）

腎機能：排泄性腎盂撮影で両側共に極めて鮮明な腎盂尿管像を得た。

膀胱鏡検査：容量 400cc，内景は概して正常であるが左側尿管口の内上方にはほぼ示指頭大の有茎性の腫瘍1ヶを認め，その表面は平滑，正常粘膜状を呈していた。なお左尿管口の外上方に1ヶの乳頭腫状の腫瘍が認められ，血尿はこれによるものと考えた。

以上の所見から，乳頭状腫瘍並びに良性腫瘍と診断し，膀胱鏡写真を撮影した後に（第1図A，B），腰麻の下に高位切開により剔除した。

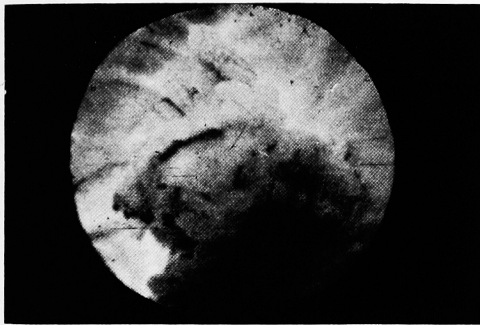
手術所見：高位切開により膀胱に達し，内腔を観察



第1図 A 症例1の平滑筋腫の膀胱鏡写真



第2図 症例1の組織像 100×



B 症例1に併発した乳頭腫の膀胱鏡写真

すると、底部にはほぼ球状を呈する平滑な正常粘膜に被われた腫瘍1個を認めたので腫瘍基部を結紮切断しようと軽く牽引したところ、腫瘍は膀胱粘膜から自然に千切れて、難なく剔出することができた。切断部には電気凝固を行つた。次に左尿管上線に存在する有茎性の乳頭状腫瘍を牽引して結紮切断し、同様に電気凝固を行つた。ネトランカテーテルを留置して創を閉じたが、その後の経過は順調であつた。

剔出標本：前者の平滑な腫瘍は大きさ $1.5 \times 1.0 \times 1.0$ cm, 重さ 3.0 g, 表面平滑な弾性軟の紅色腫瘍であつた。

組織学的所見：粘膜下に紡錘形の核を有する紡錘状細胞の束状増殖がみられ、横紋は認められず、平滑筋腫と診断された(第2図)

後者の乳頭状腫瘍は移行上皮よりなる乳頭腫で悪性の像は発見できなかった。

症例2：30才の男子 運転手。

昭和37年9月28日初診。

主訴：頻尿、遷延性排尿。

既往歴及び家族歴：特記すべきことはない。

現病歴：約1年前より頻尿と遷延性排尿をおぼえた。血尿、排尿痛もないが、下腹部に不快感を訴える。排尿回数は次第に増加して夜間8~10回に及ん

だ。

現症：体格稍小、瘦形。心肺に異常はない。肝臓は右季肋下に一横指触れるが肝縁は鋭い。腎臓は半座位で右側の下極を触れるのみ。膀胱部、外性器、前立腺に異常なし。

尿所見：全く清澄、沈渣に少数の赤血球を認めた。

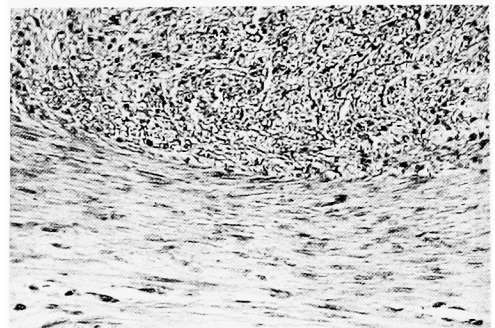
血液所見：赤血球 410×10^4 , 白血球 7,800, 血色素量75% (ザーリー法) 血清梅毒反応陰性。

肝機能：血清蛋白量 8.0g/dl, CCF (-), TTT (2.7), Al-ph-ase (3.6B.U.), GOT (10)。

膀胱鏡検査：容量 300cc, 膀胱粘膜に著変はないが、頭部右側7時の部に示指頭大の半球状の表面平滑な腫瘤が認められた。なお底部に小結石2ヶが存在する。前記遷延性排尿障害はこの腫瘤に由来するものと考へ、高位切開による腫瘍剔出を試みた。

手術所見：型の如き皮切により、膀胱内腔に達し、先ず底部にあつた金平糖状、米粒大の小結石2ヶを摘出した。腫瘤は頭部の右側7時の部に内尿道口を塞ぐような格構で認められた。腫瘤の表面は正常粘膜で覆われ、基部は有茎状であり、症例1と同様に牽引すると容易に千切れ、その部を要気凝固も行い、留置カテーテルを設けて手術を終つた。

剔出標本：大きさ $2.1 \times 1.9 \times 1.7$ cm, 重さ 4 g. 組織



第3図 症例2の組織像 100×

学的には多様の平滑筋が交錯し、あるいは平行に整列するのが認められ、平滑筋腫と診断された(第3図)、小結石の成分は2ヶともに尿酸石であつた。

考 按

本症は膀胱腫瘍のうちでも非常に稀なものであり、Campbell ら (1953) でも純粹の平滑筋

腫を文献上から68例を集めているに過ぎず、本邦では志田ら (1958) が本邦の症例18例を総括している。その後現在まで林、杉村、水木、南、今中らの報告があり、著者の例を合せると本邦の報告例は26例となる(第1表)

病理組織学的所見: Campbell は筋腫を Fib-

第1表 本 邦 報 告 例

	年度	報告者	年令性	診 断 名	症 状	合 併 症
1	1916	大野・高岡	47 ♀	筋 腫	排尿困難 月経時陰に腫瘍現出	子宮筋腫 腹水、膀胱炎 両側化膿性腎炎 転移あり
2	18	高木・盆頭	53 ♀	悪性筋腫	排尿障碍、排尿痛、尿失禁	
3	19	石 川	31 ♀	膀胱腺筋腫	月経時頻尿 膀胱尿道索引痛	子宮と癒着卵管閉塞
4	20	河 田	34 ♀	膀胱腺筋腫	月経困難	
5	27	川 上		膀胱筋腫		
6	28	吉 川	32 ♀	腺 筋 腫	排尿時膀胱部 疼痛及血尿	慢性膀胱炎
7	35	高橋・土屋	48 ♀	膀胱線維筋腫	排尿痛、血尿、尿意頻数	慢性膀胱炎
8	37	有馬・大倉	11ヶ月 不明	膀胱線維筋腫	軽度発熱、尿量減少 熱上昇、膿尿	化膿性腎炎尿 管 拡 張
9	39	永 瀬	50 ♀	膀胱平滑筋腫	血尿、尿意頻数、尿閉	左卵巢嚢腫 両側化膿性腎炎
10	39	松 岡	23 ♂	線維平滑筋腫	下腹部無痛性腫張 尿意頻数、排尿痛	
11	41	北村 藤井	40 ♀	膀胱筋腫兼 子宮筋腫	内診により触知	子宮筋腫
12	41	齋藤・関村	39 ♀	膀胱線維筋腫	排尿障碍、血尿、尿閉	化膿性腎炎
13	41	小 林	11 ♂	筋 腫	尿意頻数、血尿、尿閉	化膿性腎炎 腎盂炎膀胱炎
14	42	内 保	59 ♀	筋 腫	帯下排尿後鈍痛	子宮筋腫膀胱炎
15	52	益田・生野	26 ♀	筋 腫	下 腹 痛	
16	52	星 島	49 ♀	滑平筋腫	終末時排尿痛	
17	53	伊藤・真井	45 ♀	血管筋腫 一部悪性化		左骨盤腹膜下に有茎腫瘍
18	53	原 田	66 ♂	線維筋腫	下腹痛、尿意頻数	
19	55	志田・藤田	27 ♀	滑平筋腫	頸部前壁	排尿障碍尿道より腫瘍の現出
20	59	水本・佐藤	22 ♀	膀胱筋腫	血 尿	
21	59	林・浅井	80 ♂	膀胱平滑筋腫	排尿障碍、血尿、尿閉	前立腺肥大 膀胱憩室膀胱結石
22	59	杉村・新海	60 ♂	平滑筋腫	血尿、尿意頻数	
23	60	今中・斉藤	25 ♂	"	血 尿	
24	61	南・福島	29 ♀	"	血尿、尿意頻数	
25	63	江本・重見	72 ♂	"	血 尿	膀胱乳頭腫
26	63	" "	30 ♂	"	遷延性排尿困難 尿意頻数	膀胱結石

romyoma (22例), Leiomyoma (68例), Rhabdomyoma (16例) に分類しその過半数を占める Leiomyoma でも純粹な平滑筋腫は

むしろ少なく、多くは線維性組織と腺組織との混合型であるとの見解をもっており、さらに極く稀には悪性変化を示すことがある点に言及し

ている。しかし我々の症例は図示するように純粋な平滑筋腫であると考えられ、極めて稀な典型に属する。

年齢及び性別：本邦症例では生後11ヶ月から最高80才に及んであり、とくに年齢の特性は認められない。性別では男子8例、女子16例、不明2例となり女子に多発するように思えるが、新しい症例ではかなり男子も多くなっているが、Herbut はとくに性別に差異はないと述べている。

発生部位：部位を問わず膀胱の何れの個所にも単発或は多発してくるものであるが、本邦の統計では三角部、後壁に多いようである。発生位置から粘膜下型、壁内型、漿膜型に分けられており、粘膜下型が最も多い。我々の2症例も粘膜下型であり、一つは後壁に、他の一つは頸部に発生したものであつた。

大きさ：大きいものでは3kgを越えるものもあるが、一般には鳩卵大から手拳大程度のものであつて、我々の2症例は各々4g、3gで小さい方である。あるいはこのことが純粋型を呈した一因かも知れない。

症状及び合併症：膀胱内に腫瘍が存在すれば当然排尿障害が発するであろうし、その多くは膀胱刺激症状であらう。また部位によつては排尿困難、尿閉、尿失禁などが現われてもよい。その他に血尿、月経困難、尿線中絶、外尿道口よりの腫瘍の突出などの報告も見られる。

合併症としては急性および慢性膀胱炎が最も多く、さらに二次的に化膿性腎炎を併発した症例もある。恐らく部位によるのであらう。また志田らは上部尿路感染が本症の死亡原因と推測される症例について記載している。他に子宮筋腫の合併したもの2例、前立腺肥大症に合併した1例がある。

我々の症例1は血尿を主訴としてきたが精査の結果は乳頭腫が併発しており、このための出血によつて発見が早かつたと思われる。また症例2は筋腫の発生部位が内尿道口に近く、ために内尿道口を閉塞して、これによる排尿障害が早期受診、早期治療を可能としたかと思われる。腫瘍が小さいこと、組織学的に純型であつ

たことの主因であらう

平滑筋腫は一般に良性であるため、何等かの合併症ないしは排尿障害を伴わない限り発見は困難である。血尿を主訴として来ることもあるが、腫瘍表面の組織が損傷されて始めて血尿が現われるものと思われ、屢々腫瘍表面に小なる結石の附着が認められている。今回の症例のも腫瘍とは離れて底部に結石2ヶを認めたが、このような小結石の合併は腫瘍表面粘膜に結石形成の原因になる変化の起りつつあることを思わせる。良性腫瘍であつても、また小さな有茎腫瘍であつてもその存在する期間に応じて次第に種々の変化を起し得るものであらうことを考えさせる。

予後；本邦の26症例のうち、死亡例は8例であり、うち5例は尿路感染による。本邦では未だ報告に接していないが、時に悪性肉腫に変化し、転移、再発を来したとの報告が欧米では見られている。しかし一般には手術的療法で経過は極めて良好である。

結 論

わたくしたちは72才および30才の男子に発生した平滑筋腫2例を経験した。1例は他に膀胱乳頭腫を1例は膀胱結石を合併しており、観血的剔出により治癒した本症例を含めて本邦の報告例26例について本症の概括を行つた。

文 献

- 1) Campbell & Gislason: J. Urol., 70: 733, 1953.
- 2) Hinman: Principles and Practice of Urol. p. 936, 1936.
- 3) 林敏雄他：臨床皮泌，13：371，1959.
- 4) 齊藤弘徳他：体性，28：228，1941.
- 5) 杉村克治：泌尿紀要，5：45，1959.
- 6) 水木龍助他：臨床皮泌，13：251，1959.
- 7) 志田圭三他：臨床皮泌，12：691，1958.
- 8) 南武他：日泌尿会誌，52：85，1961.
- 9) 今中千秋他：三重医学，4：2467，1960.